

CREATIVE PLATFORM

SPECIAL INTERVIEW

松浦 弥太郎

YATARO MATSUURA

CREATIVE PLATFORM CAFÉ vol.3

日常や仕事のなかにある 価値の見極め方、磨き方

全国のクリエイティビティを活用した産業創出に関わる方々をゲストに迎え、定期的で開催するトーク & 交流イベント『CREATIVE PLATFORM CAFÉ』。

今回のゲストは、Webメディア『くらしのきほん』主宰の松浦 弥太郎さんです。

出版不況の只中に『暮らしの手帖』の編集長に就任し、9年間で売り上げを倍増させた松浦さんは、当たり前のように感じている日常のなかの物事の本質を見極め、価値を磨いて再発信し、共感を得ることをビジネスに繋げています。その手法によって、どのような課題解決や発展をもたらしてきたのか、具体例を交えてお話しいたします。

会場となる別府市 鉄輪地区では、高温の蒸気を利用した調理法「地獄蒸し」が古くから生活のなかで活用されてきました。最近では、その価値を現代の食生活に合わせて見直すことにより、高価格帯の商品が生まれるなど、全国的にも紹介されています。今回のイベントでは、松浦さんにご提示いただいた「最初のひとくちよりも最後のひとくち」をキーワードに、オット・エ・セッテ 大分の梯 哲哉シェフが考案したコース料理を召し上がっていただきます。「地獄蒸し」という地域資源を活かし、大分特有の食材の魅力を最大限に高めるシェフの創作料理は、松浦さんの姿勢と同様、本質を見極め、価値と魅力を磨く事例だと考えています。「日常や仕事のなかにある価値の見極め方、磨き方」について、トークとコース料理を通して考察します。



【開催日】

2月10日(金)

18:00～21:00(開場17:30)

【ゲスト】

松浦 弥太郎

(『くらしのきほん』主宰、エッセイスト、セレクトブックストア『COW BOOKS』代表)

【モデレーター】

山出 淳也

(CREATIVE PLATFORM OITA 編集長)

【会場】

オット・エ・セッテ 大分(大分県別府市井田2組)

【参加料金】

5,400円(税込)

本イベントのための特別なコース料理付

※ドリンク代は含みません。

当日会場にて別途ご注文ください。

【定員】

40名

【主催】

CREATIVE PLATFORM OITA

SPECIAL INTERVIEW 5

松浦 弥太郎

『暮らしのきほん』主宰、エッセイスト、
セレクトブックストア『COW BOOKS』代表

『暮らしの手帖』の編集長を経て、現在はWebメディア『暮らしのきほん』を運営する松浦 弥太郎さんは、10代でアメリカに渡り、当時まだ誰も知らなかった新しい価値を持ち帰り、ビジネスを立ち上げました。あるべき価値に磨きをかけて再発信することによって、出版不況の只中にあった『暮らしの手帖』を立て直し、現在はWebメディアの新たな可能性に挑戦する松浦さんに、仕事における信条を語っていただきました。

聞き手：山出淳也



山出：松浦さんは、10代後半でアメリカに渡ったのをきっかけに、本を介してビジネスをするようになったんですね。販売するのは古書が中心ですか？

松浦：ええ。美術館や図書館にも納品していたので、最高レベルのオールドブックやオールドマガジンを自分の手で触り、自分の目で見てきました。

山出：本を「見る」とは、具体的にどういった点に着目されるのでしょうか？

松浦：紙質、デザイン、それからコンテンツのテーマとリズム。

僕はその本の価値や素晴らしさを伝え、それを欲しているクリエイターに届けることを仕事にしてきました。言ってみれば、メディア作りの裏側をずっと見てきたようなものです。その経験は、本や雑誌やメディアを作るうえで貴重でしたし、価値を伝えるという訓練は今も役立っていますよ。

山出：その後、2006年に『暮らしの手帖』の編集長に就任されるわけですが、当時はすでに出版不況と言われた時期ですよね。

松浦：ええ。当時の売り上げは10万部だったのですが、僕は入社したとき、それを倍にすると会社に約束したんです。それを果たすのに9年もかかってしまいました。

山出：すごいですね。具体的にはどのような変革をされたのでしょうか？

松浦：いろんなものを取っ払い、『暮らしの手帖』らしいものに戻しました。それで怒

る読者もいましたが、実際に部数は少しずつ伸びて、会社は立ち直りました。

ただ、雑誌というものは、たとえいい状態が続いていたとしても、せいぜい5年くらいで編集長を変えなきゃいけない。読者が飽きたらおしまいなので、常に先手を打って変えなければいけないんです。

辞めるにあたって周囲からは反対されましたが、当時49歳だったので、40代のうちに新しいチャレンジをしたいという思いもありました。



Webメディア『暮らしのきほん』
(<https://kurashi-no-kihon.com>)

山出：その新しいチャレンジが、Webメディア『暮らしのきほん』の立ち上げだったんですね。

松浦：ええ。インターネットやスマートフォンの普及によって、メディアのあり方が大きく変わるのを自分の目で見ておきたかったんです。

僕は、まだみんなが気が付いてない、素敵なことや嬉しいこと、お金を出してでも手に入れたと思うものをみつけたいんです。

同じ場所に居続けたら、なかなか気付かなくなってしまいますからね。

山出：『暮らしのきほん』では、どのような目標を立てられているのでしょうか？

松浦：まだユーザーが体験したことがない、日々役に立つメディアを開発することですね。印刷物ではできないことをどんどん取り入れていきたいと思っています。『暮らしのきほん』は完成を目指すのではなく、日々新しい発明を生み出して、それを定着させていくメディアなんです。

山出：印刷物とインターネットでは、情報のあり方に違いがあるものなのでしょうか。

松浦：僕らが発信しているのは情報ではなくて、暮らしに役立つ知恵や工夫です。コンテンツを作るときには「100年後の人も喜ぶコンテンツであるか」ということを大事にしています。それはつまり、アーカイブなんです。たとえば1年前のものを今日見ても役に立つような、古くならないコンテンツを作り続けたいですね。

『暮らしのきほん』は、コンテンツだけではなく、ユーザーとの関係性の深さとか信用とか、やったこと全てが蓄積されるメディアでありたい。だから、いかに消費されないかってことが重要だと思っています。

山出：メディアを作るうえで、意識していることはありますか？

松浦：自分自身が『暮らしのきほん』の一番のユーザーであり、一番のクレマーでもあることです。

ユーザーの視線を持たなければ、メディアを作ることはできません。だから僕は、作り手であると同時に利用者でもあり、自分にとって「嬉しい」「ちょうどいい」感覚を探り続けているんです。

山出: 2つの相対する視点で検証することで、本質的な価値をしっかりと見据えていらっしゃるんですね。

松浦: ビジネスは時間の取り合いなんですよ。だから、それに時間を使う価値があるのかを常に考えなければいけないし、人がお金と時間を使う傾向を知っておく必要があります。

人は今の自分を助けてくれるものにお金や時間を使いたいんだと思います。きっと街やコンビニをぶらぶらしながら、みんなそれを必死で探しているんです。だから僕は、どんな仕事の時にも「それで誰かを助けることができるのか」と自分に問いかけています。

誰かを助けるために何を提供できるのか。その真心そのものが根本であり、一番に大切にすべきことです。

山出: 本来はそこを考えるのが、クリエイ



ティブやデザインの仕事ですよ。

松浦: だから、もっと真心を発信するべきなんです。情報は流れて消えてしまうけれど、真心という感動は人の心に蓄積されます。

感動を発信しなければ、メディアは信頼を得られない。だから僕は、情報なんか発信しないよ。感動しか発信しない。

松浦 弥太郎

(『くらしのきほん』主宰、エッセイスト、セレクトブックストア『COW BOOKS』代表)

1965年、東京生まれ。高校中退後に訪れたアメリカの書店文化に惹かれ、帰国後オールドマガジン専門店『m&co.booksellers』を赤坂に開業。2000年にトラックによる移動書店をスタートさせ、2002年『COW BOOKS』を開業。書店を営むかたわら、執筆および編集活動も行う。2006年から『暮らしの手帖』編集長を9年間務め、2015年4月にクックパッド(株)に入社。「正直、親切、笑顔、今日もていねいに」を信条とし、暮らしや仕事における、たのしさや豊かさ、学びについての執筆や活動を続ける。

『OITA CREATIVE WEEK』開催レポート

大分市の大分銀行 赤レンガ館(登録有形文化財)を会場に、12月7日(水)から10日(日)の4日間、さまざまな切り口でデザインやクリエイティブについて考える連続トークイベント『OITA CREATIVE WEEK(おおいたクリエイティブ・ウィーク)』を開催しました。

初日の12月7日(水)には、株式会社ロフトワークが主催する『MORE THAN PROJECT Local Talk Jam CARAVAN』を開催しました。株式会社国東七(くにさきゼブン)取締役会長の中野伸哉さんと、株式会社 山下工芸の安部 浩さん・公 延凱さんをお招きし、それぞれの取組事例をもとに「大分の豊かな資源を生かした販路開拓への挑戦」をテーマにトークを展開しました。12月9日(金)の『出張! クリエイティブ相談室』では、大分県内の3企業の代表者をゲストに招き、農業、リサイクル業、建設業が抱える課題や悩みを共有し、解決のヒントを探りました。最終日のNPO法人 FUKUOKA デザインリーグと九州アートディレクターズクラブの主催による『デザイン横丁 in 大分』では、会場のみなさんから挙げられたデザインに関する疑問や質問にゲストパネラーらが回答し、1つずつ解決していきました。

12月8日(木)に開催した『CREATIVE PLATFORM CAFÉ vol.2』については、裏面にて詳細をレポートしています。

また、連日多彩な企画が展開した連続トークイベント『OITA CREATIVE WEEK』のより詳細なレポートは、『CREATIVE PLATFORM OITA』の公式Webサイトにアップいたします。こちらも併せてお読みください。

OITA CREATIVE WEEK



12月7日(水)『MORE THAN PROJECT Local Talk Jam CARAVAN』のようす

今回のイベントのために、県産材を活用して独創的な空間を作ってくださったのは、大分市の建築家・光浦高史さん(DABURA.m.inc.)です。「一時的なリノベーション」をテーマに設計され、使用した資材はイベント終了後に再利用することを前提に、最小限の加工に留められました。

CREATIVE PLATFORM CAFÉ vol.2 開催レポート

12月7日(水)から10日(日)の4日間にわたって開催した『OITA CREATIVE WEEK』。2日目の12月8日(木)は『CREATIVE PLATFORM CAFÉ vol.2』を開催しました。

1人目のゲストは、スープ専門店『Soup Stock Tokyo』やセレクトリサイクルショップ『PASS THE BATON』など、多彩な事業展開で知られる、株式会社 スマイルズ 代表取締役社長の遠山正道さん。「20世紀は経済の時代、21世紀は文化・価値の時代」と定義し、「価値とは何か」を問い続けることから数々のビジネスを生み出しています。個人の発意から始まるスマイルズのビジネスは、社員1人ひとりの人生と重なっています。その姿に多くの人が共感し、社会における価値へと広がっていくのでしょう。「100億円のビジネスではなく、1億円のビジネスを100個始めたほうが、100人の人生が沸き立って面白くなるのではないかと、いきいきとした笑顔で語る遠山さんのプレゼンテーションは、聞く人を惹きつける強い引力がありました。

2人目のゲストは、不動産の新たな価値と可能性を発信し続ける『東京R不動産』の活動でも知られる、株式会社 Open A 代表取締役の馬場正尊さん。馬場さんが最初に挙げたキーワードは「中間領域」でした。個人宅の軒下から道路にかけて、いすやテーブルを出してくつろぐ写真を例に、パブリックとプライベートの間にある空間のおおらかさや豊かさを示されました。このような「何もないけど、可能性だけがあ

る空間」にイマジネーションを刺激され、さまざまな物件のリノベーションを手掛けて来た馬場さんは、「次にリノベーションすべきは公共空間である」とし、公共空間の貸し借りができるWebサイト『公共R不動産』を開発しました。その根底には「パブリックスペースは行政空間ではなく公共空間である」というメッセージが込められています。パブリックという概念自体をリノベーションし



たいという馬場さんの強い信念がこもったプレゼンテーションは、多くの参加者の共感を集めました。

続いて、大分銀行の三代吉彦さんに会場の赤レンガ館の歴史についてご紹介いただき、第2部のクロストークに移りました。ここではお2人のプレゼンテーションを深掘りするとともに、赤レンガ館をどのように活用すると面白くなるかなどをお伺いしました。お2人からは、ネオ雀荘やローラースケート場など、思いもよらないアイデアとともに「今

までにない組み合わせ」や「クレイジーなことを価値にする」など、ビジネスを生み出す種となる金言もたくさんいただきました。

ゲストのお2人が共通してお話しされていたのは「価値」についてでした。供給過多の時代においては、価値を高めなければ流通を促すことはできません。常に価値とは何かを見極める力を持つことが重要です。一方で、マーケティング分析によって生み出された商品よりも、「自分は好きだけど、一般的には受けないかもしれない」と言われるようなものの方が購買に繋がりがやすいのだそうです。個人の感性に訴えかける商品やサービスを生み出すことこそが、クリエイティブな価値創造のあり方であると感じました。

今回は大分銀行 赤レンガ館を例にとりましたが、すべての空間が可能性を持つことや、個人の感性に響く商品・サービスを提供することの重要性を再認識する有意義なイベントとなりました。

● イベント後記

ゲストのお2人はこの日が初対面でしたが、お互いのプレゼンテーションに深く共感しあい、イベント終了後も「価値」について、熱く意見を交わしていました。場や空間は資源であること、そして誰もが持っているクリエイティビティを発揮し、それを活用して価値を創造することが、新たなビジネスを生むことに繋がるのだということを改めて感じさせられました。

CREATIVE PLATFORM NEWS とは

大分県ではクリエイティブな手法による新たな産業創出を目指し「平成28年度 クリエイティブ・プラットフォーム構築事業」を実施しています。本事業は、大分県内の企業が有する技術やノウハウに、クリエイティブな発想や考え方を組み入れることによって、競争力の高い商品・サービスの開発や、新規マーケットの創出につなげることを目的としています。本年度は公式Webサイト『CREATIVE PLATFORM OITA』および、交流イベント『CREATIVE PLATFORM CAFÉ』を通じて、全国の

事例を知るとともに、大分県におけるクリエイティブ産業のあり方や、その可能性を考察します。『CREATIVE PLATFORM NEWS』では、本事業の最新の情報と、全国各地でクリエイティビティを活用した事業に取り組む方々へのスペシャルインタビューをお届けいたします。また、本紙でご紹介する方々をゲストに迎える『CREATIVE PLATFORM CAFÉ』では、トークイベントと交流会を定期開催します。大分のクリエイティブを刺激する情報の発信・共有の

場となるよう、毎回異なるテーマや演出を予定しております。ぜひお問い合わせのうえご参加ください。本事業の最新情報は、公式サイト『CREATIVE PLATFORM OITA』および Facebook、twitterからもご覧いただけます。また、メールマガジンにご登録いただくと、イベント情報の先行告知や先行予約などの特典のほか、事業の最新情報や会員だけが読めるスペシャルコラムなどを無料でお届けいたします。

ご登録は公式Webサイトから <http://creativeoita.jp>



本紙掲載情報およびイベント参加のお申し込み・お問い合わせ NPO法人 BEPPU PROJECT (担当 松田・田島) 営業時間: 月～金 9:00-18:00 tel: 0977-22-3560

発行・編集 発行元: 特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT 〒874-0933 大分県別府市野口元町2-35 菅建材ビル2階 url: <http://www.bepuproject.com>
発行人: 山出淳也 (特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT 代表理事)

*本紙は「平成28年度クリエイティブ・プラットフォーム構築事業」の最新情報をお伝えする広報紙です。本事業はNPO法人 BEPPU PROJECT が大分県から業務委託を受けて企画・運営しております。